

在のベトナム政府が、自らの加害責任を問われるような事実を認めることはない。

また、民間人虐殺問題に限らず、旧南ベトナム地域の人々が自発的に事実を検証し、その情報が全民族レベル（在外ベトナム人も含めて）で共有されることも、共産党の一元的支配にとっては脅威である。筆者は「戦争に勝利をおさめたことは、ベトナム共産党の正当性の源泉」（p. 201）としているが、現在の共産党政府は、もはや過去の民族解放の実績だけでは支配の正当性を主張できない。「経済発展こそが国民を統合する最高の装置」（p. 201）ではあるが、経済発展の実績は共産党体制の維持のためにも不可欠であり、それゆえ、韓国も含む諸外国との経済関係が自国民の意志よりも優先されるのである。今や、共産党体制下で言論を封殺されている人々は、「現政権への貢献がなかった戦争被害者」（p. 202）だけではなく、革命功労者もその中に含まれている。

事実を覆い隠したり、ごまかしたりすることでは、「赦し」・「和解」は成し遂げられない、と著者は説いている。南北統一からやがて 40 年になろうとするベトナムだが、現政府は自らの不都合な歴史にもフタをしたまま、正式な南北間の民族和解は成立していない。記憶を新たにすることで、国家間のみならず民族内部でも、かつての敵を赦すと同時に、勝者側も赦されるような、真の和解に至る日が来るのだろうか。

Ramnarayan S. Rawat. *Reconsidering Untouchability: Chamars and Dalit History in North India*. New Delhi: Permanent Black, 2012, xix+272 p.

増木優衣 *

本書は、現代インドにおける被差別民である不可触民（ダリト）の歴史について再考する書である。ダリトは、その多くが農業従事者であったにもかかわらず、英国による植民地支配を通して不浄な職業と結びつけられ、独立運動期にはそれが彼らのアイデンティティ・ポリティクスに発展していく。本書はその歴史的過程を、とりわけダリトの主体性に着目しつつ明らかにすることを目的とする作品である。

対象地は 19～20 世紀の北インド、ウッタール・プラデーシュ州であり、対象となるのはダリトに属するチャマール（Chamar）・カーストの人々である。第 1 章および 2 章では、皮革業が彼らの伝統的な職業であるとのステレオタイプが形成されていく過程を、全国レベルで作成される報告書とともに、州・県レベルの報告書を用いて明らかにしている。第 3 章から 5 章にかけては、創出されたステレオタイプを受けて構築されるアイデンティティ闘争の歴史と、それが公共領域におけるダリト以外の組織に影響を与えていく様子が描かれる。以下にまず概略を示し、その後に評価を記したい。

第 1 章では、チャマールが植民地政府や

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ナショナリストにより牛の毒殺事件の犯罪者に仕立て上げられ、それがヒンドゥー社会に受容されていく過程を描写する。具体的には、州・県レベルの報告書では書かれていない事実が、全国レベルの報告書では創られていった過程を明らかにする。

1800年代後半に死牛の数が増加したが、植民地政府の官僚は、それをチャマールがヒ素を用いて「組織的に行った職業的犯罪 (p. 25)」であると非難した (1854 年報告書)。しかしもともとは、この現象に対する当時の大衆による見解は、英国軍の兵営に本国から持ち込まれた牛により、伝染病である牛疫 (rinderpest) が広められたというものであった。そこで、このような見解による悪評が立つことを恐れた植民地政府は、1869 年報告書および 71 年の、獣医から政府のインド牛疫病委員会 (Indian Cattle Plague Commission) に提出された報告書に基づき、チャマール・カーストと皮革業を結びつけることで、牛の大量死が、経済的欲求の充足を目指し多くの牛皮を求めたチャマールによる犯罪であるとの見解を発表したのである。著者は、1873 年および 78 年の県報告書を用いて「一般大衆によって牛殺しがチャマールによる毒殺であると報告された事例は一つもない (p. 31)」ことを明らかにしている。チャマールがヒ素を保持していたのは事実であるものの、それは牛の毒殺ではなく死牛の皮を保存するためであった。この事実を植民地政府は看過し、チャマール・カーストの職業的アイデンティティに基づき彼らの罪責が確定されていった。

植民地政府により創出されたチャマールの罪責は、次第にダリトのコミュニティと対立的なアイデンティティを保持する中産階級のヒンドゥー教徒から支持されるようになる。ここでも、植民地政府により生み出された「チャマールというカーストによって牛の毒殺が引き起こされる (p. 48)」という信念が共有された。

第 2 章では、皮革業と結びつけられるチャマールが、当時はどのような職業に従事していたのかが明らかにされる。実際は、多くのチャマールが自作農あるいは小作農として働き、たとえばエタ県における 1888 年報告書によれば、「副業としてギー (牛から作るインドのバター) や牛乳、手製の綿布などを売って生計を立てていた (p. 75)」ことが述べられている。1888 年出版の、農村部の低カーストに関して言及された報告書によれば、チャマール・カーストの生活描写のなかに、「土地なしあるいは皮革業従事者としてのチャマールという言及はほとんどなかった (p. 76)」。チャマールは、その不可触性 (*Untouchability*) にもかかわらず、19 世紀北インドの農村社会において重要な位置を占め、皮革業は彼らの排他的・専門的な職業ではなかったことを明らかにしている。

第 3 章では、実際に皮革業に従事していたのは誰であったのか、産業化・近代化の進行に伴いチャマールはいかなる産業に従事することとなったのかが述べられる。植民地政府は、19 世紀後半以降に皮革製品の国外輸出需要と国内需要に対処するため、皮革製品製造工場の設立を推進した。植民地政府とナ

シヨナリストは、ともにチャマールが伝統的に皮革業に従事し続けてきたと認識していたために、その際労働者として動員されたのは、皮革業と結びついたチャマール・カーストの人々であった。

しかし、政府のセンサスが行なわれる以前から、実際に皮革業を担っていた主流はチャマールではなくムスリムであり、皮革製造工場での作業や皮の取引を行なうディーラーとして重要な役割を果たしていたことが、特に 1813 年の内科医による調査報告書や 1880 年出版のラクナウ判事によるモノグラフが証明している。このようなムスリムの優勢にもかかわらず、チャマールが認識論的に皮革業と強く関連づけられた背景には、「当時の民族誌学者がチャマール・カーストと皮革業の関係を、農地保有カーストとサービス・カーストとの間のパトロン・クライアント関係を示す『ジャジマーニーシステム (*jajmani system*)』の一部として理解したことにある (p. 106)」と著者は指摘する。これらは植民地政府によるセンサスを通してカテゴライズされた「カースト」により生み出されたものであるとされる。この想定はナシヨナリストにも内面化され、ダリトの生活向上はカーストに基づく職業に沿った訓練を通して行なわれるべきだとし、インド国民会議派 (Indian National Congress) は 1936 年デリーにダリト向けの手工業作業工場を設立した。このように、カースト・ヒンドゥー (ダリト以外の一般カースト) とナシヨナリストは植民地政府とともに、カーストの固定化と再生産において重要な役割を担ったこと

が指摘される。

第 4 章では、このような上からのカースト・アイデンティティの付与に対して、実際にチャマールの人々が自らのアイデンティティ獲得のための闘争を展開する歴史が描かれる。この歴史は 2 つの段階に分けられる。第一は、1910 年代からチャマールなどダリトの人々が、ヒンドゥー教の古典に基づき、クシャトリヤ (*Kshatriya*) の地位を主張したことである。彼らは支配的言説への抵抗において、ヒンドゥー社会で共有されていた価値に基づき新たな解釈を試み、一般のヒンドゥー教徒と同等の地位を得ようとした。クシャトリヤの地位を強調するために、チャマールは自らの慣習である飲酒や肉食を控え、それによって浄性を求めた。1922 年から 28 年にかけてのラクナウ警察による捜査報告書は、この期間にチャマールによる会議や抗議活動が頻繁に展開されていたことを示す。チャマールによる運動は、20 世紀北インドにおけるダリト・アイデンティティ闘争の皮切りとなった。この運動は当時のヒンドゥー改革団体であるアーリヤ・サマージ (*Arya Samaj*) にも影響を与えた。1920 年代にアーリヤ・サマージは、チャマールによって主張された浄性の、カースト・ヒンドゥー社会における包摂を志向し、ダリトが直面していた寺院参拝と公共井戸使用の禁止に対する緩和を求め、活動を展開した。

第二は、1927 年に設立された「全インド原ヒンドゥー大連合 (*All India Adi-Hindu Mahasabha*)」による「原ヒンドゥー (*Adi-Hindu*) 運動」である。この運動では、すべ

てのダリトがインドの先住民であることが主張され、チャマールらは、言説としての不可触性に基づき規定されるアイデンティティに対抗し、政治的・社会的変革を求めて公共領域における活動を展開し始めた。

第5章では、1927年から56年にかけて、チャマールが不可触民としてのアイデンティティを通して政治的に活動していく様子が描かれる。まずは、1937-38年にかけて、ウッタル・プラデーシュ州各地の原ヒンドゥー運動の指導者が、ムスリム連盟 (Muslim League) と協定の締結を決定し、会議派と支配的なヒンドゥー社会への対抗を示したことである。そして著者は、ダリト出身の政治家ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル (B.R. Ambedkar) による1942年設立の指定カースト連盟 (Scheduled Caste Federation) と1956年設立のインド共和党 (Republican Party of India) の活動に着目する。チャマールを主導とするダリトは、ダリト集団における教育・雇用に対する留保制度や、カースト・ヒンドゥーとの間の分離選挙を主張し、当時インドにおいて独立運動を担っていた国民会議派との差異を強調した。

結論では、まず、チャマールが伝統的な皮革業従事者ではなく、農民であったことが実証的に明らかとなったことが述べられる。そして、農業従事者であったにもかかわらず、認識論的レベルにおいて皮革業と強く結びつけられ、彼らのアイデンティティとして植民地政府およびヒンドゥー社会から与えられた表象が、1927年以降のダリト運動におけるアイデンティティ・ポリティクスにつなが

り、1947年以降現在に至るまでのダリト解放運動に深く影響を与えているとする。

以上が本書の概要であるが、本書は次の3つの観点から画期的な意義があると評価できる。

①従来の歴史学は、チャマールのアイデンティティが伝統的皮革業と密接に関連しているとし、そこからダリトの歴史を描こうと試みてきた。しかし実際は、この連関が植民地支配におけるセンサスをはじめとする一連のカーストのカテゴリー化により創出されたステレオタイプであり、実際のチャマールは農業従事者が多数を占めていたことを実証的に証明した点である。

②上を実証的に証明するにあたって著者が用いた研究手法は、次の点において独創的であった。すなわち、著者は、センサスなど帝国主義的实践を志向した国家レベルでの植民地的「知」の生産 (p. 19) に直接的に影響した資料と、州レベル・県レベルでの植民地政府により刊行された資料を注意深く区別し、後者の示すダリトの生活や職業の実態に関する多様性に重点を置いた。具体的には、地租査定報告書 (settlement report) や小作慣行調査書 (tenancy inquiries)、特定の県を対象とした研究論文などに焦点を当てた。それによってチャマールをはじめとする人々の生活の実態を明らかにしつつ、他方で植民地政府およびナショナリストが国家レベルで構築する言説に着目し、それがローカル・レベルの言説を変容させていく相互作用を詳細に分析することで、チャマールと皮革業との間に強い連関性を想起させるステレオタイプが

創出されてきた歴史的経緯への詳細な理解を提出している。

③このようなカテゴリー化を通じたステレオタイプの形成により生み出されたチャマル・アイデンティティは、一方では 1927 年以降の原ヒンドゥー運動にみられるように、ダリト・アイデンティティを追求していくアイデンティティ闘争につながっていくが、他方でより普遍的な理念・価値を主張し、それが外部へ開かれていたことを著者は指摘する。原ヒンドゥー運動は、自らのアイデンティティを肯定的に捉え直し、自己集団の権利拡大に対する主張を展開しただけではなく、公共領域における差別撤廃や平等などの普遍的な価値を掲げ、それがムスリム連盟やアーリヤ・サマージなどダリト以外の組織に影響を与えたのである。著者は、ダリトの歴史的な行為主体性 (agency) を描くと同時に、それが差異の強調のみに陥るのではなく、普遍的な理念を提示して一般の公共領域に刺激を与えたことを実証的に証明した点において独創的である。これは、従来のアイデンティティ・ポリティクスに対する新たな考え方を提示する画期的な作品であるといえるであろう。

このように、本書はチャマル・カーストの伝統的な仕事と皮革業が実際には関連性を有していなかったことを明らかにした。それにもかかわらず、チャマルがカースト・ヒンドゥーから付与された伝統的皮革産業従事者というステレオタイプに対抗し、ケガレからの解放を目指しながら、ダリト独自のアイデンティティに基づき活動を展開していった

歴史を詳細に描いている。

しかし、現代インドにおけるダリトは、カーストと結びつけられた伝統的職業というステレオタイプを自らの歴史として積極的に受け入れ、たとえば清掃人カーストであれば自治体の清掃部門における雇用への参入にみられるように、伝統的職業とみなされてきた仕事に就いている。これは、ダリトがステレオタイプを戦略的に受容することで、自らの生き方に積極的な意味づけを行なってきた側面があることを示唆する。本書は、現代インドにおけるダリト解放運動への深い理解を試みるうえで、このようなダリトの戦略性の詳細に関する歴史的な考察も視野に入れる必要があるのではないか、という疑問を投げかけている。

小島敬裕、『国境と仏教実践—中国・ミャンマー境域における上座仏教徒社会の民族誌』京都大学学術出版会、2014 年、338 p.

藏本龍介 *

本書は、筆者が 2010 年に京都大学大学院に提出した博士学位論文を加筆・修正して出版したものである。中国雲南省における徳宏タイ族の仏教実践を、特に国境の地域社会との関わりに注目して描いた民族誌となっている。本書の最大の特徴は、中国とミャンマーの国境域に位置する徳宏の一村 (TL 村) における仏教実践を綿密に記述することに

* 東京大学大学院総合文化研究科